

## 近代的「子ども」像と「女兒」への一考察 ——雑誌『赤い鳥』の分析から——

峠 田 彩 香

### 一、本稿の目的と問題意識

本稿では、大正七年鈴木三重吉創刊の雑誌『赤い鳥』掲載の作品に描かれた「子ども」を分析対象として、以下の二点について考察する。

第一に、『赤い鳥』が提示したとされる近代的「子ども」像、特に〈子ども〓純真無垢〉という構図を再検討することである。『赤い鳥』創刊号の標榜語（モットー）からは、本雑誌が「子供の純正を保全開発するため」のメディアとして生みだされたことが確認できる。事実本誌は、大正自由教育を担う教育者や、都市部で子を持つホワイトカラーの家庭（新中間層）を中心に多くの賛同者を得て、「童心主義」の象徴として機能し、子どもを「純真無垢」として捉える傾向を生んだ<sup>〔1〕</sup>とされる。しかし、これまでの『赤い鳥』に関する先行研究においては、そこに描かれた「子ども」像を改めて問い直すものはほとんど存在せず、わずかに、『赤い鳥』前期に当たる、創刊から昭和四年三月の休刊までの一二七冊を分析した河原和枝氏による研究<sup>〔2〕</sup>があるにとどまる。

河原氏は、描かれた「子ども」像を「良い子」「弱い子」「純粋な子」の三つに分類できるとし、三つに共通しているのが「無垢」の観念、当時の言葉でいうところの「童心」であると結論付け、従来の〈子ども〓純真無垢〉という構図をより掘り下げて論じている。

第一の「良い子」とは、「優しい子、親孝行な子、努力する子、反省する子」など「社会の道徳的価値に同調している子」であり、この場合の「道徳的価値」が伝統的な儒教的モラルではなく、西欧的な新しい市民社会型のモラルに基づいている点、また「良い子」が登場する作品では「平和」「友愛」が描かれ、いわゆる「立身出世主義」に基づく「良い子」は「まったくいない」こと、同様に「英雄主義」に基づく「良い子」も「ほとんど見られない」点を特徴として指摘している。さらに、「理想の現実に向かって積極的に行動する『良い子』は少数派」であり、「素直さ、優しさ、思いやり、反省する態度といった内面的属性によって特徴づけられ、行動よりはむしろ内面的問題が強調されている」とする。第二の「弱い子」は、貧困などの「外的・状況的要因」、あるいは自身が精神的、身体的に弱いといった「内的・

主体的要因」による「弱さ」を持つ子どもを指す。第三の「純粋な子」は、北原白秋の童謡に代表されるような「純粹」な要素を持つ子で、「非功利的」「非妥協的」な態度を貫くことや、のめり込むと他人を傷つけることを厭わぬほどの「熱中」などを「純粹を表現する要素」としている。河原氏によるこの三分類には一定の評価ができるとしても、実際に『赤い鳥』を読んでもみるとこの三分類に当てはまらない「子ども」も多く見られ、疑問が残る。

本稿の第二の目的は、特に「女兒」がどのように捉えられていたのかを明らかにすることである。これまで、幼児〜十二歳までの年齢層の男女は「子ども」としてひとくくりにされることが多かった。「少女」に関する研究<sup>③</sup>においても、分析対象は少女雑誌の愛読者であり、また作品中に描かれる、高等女学生であることが前提とされてきた。しかしジェンダー化は尋常小学校に通う年齢、もしくはそれ以前から始まっているはずである。また、中等教育を受けていない層の「少女」像について明らかにされていない点も問題である。

以上の問題意識から、河原氏の研究には欠如していたジェンダーの視点を取り入れ、かつ、中等教育を受けていない層についても明らかにするため、『赤い鳥』に描かれる幼児〜十七歳の「子ども」像、およびその男女差を検討することとした。特に、河原氏が提示した「良い子」像に着目して、その再検討を行うとともに、対極にある（悪い子）像についても新たに考察する。

「良い子」「悪い子」に分ける基準としては、周囲の人物等による、子どもに対する評価が分かる描写などから、作者の意図を汲み取るこ

とを第一とする。また時代によって「良い子」「悪い子」の基準は変化しうるが、今日的なそれに従うのではなく、極力当時の基準に沿って分類することとする。

## 二、分析方法

『赤い鳥』前期に当たる大正七年七月〜昭和四年三月に出版された一二七冊の全掲載作品の中から、①「童話」もしくは「幼年読物」「低年読物」作品であること、②創作作品であること（民話、伝記、外国作品の再話などではないこと）、③作品中で「子ども」が主な登場人物として描かれていること、の三点を全て満たしている作品を分析対象として、二五三編を選出した。なお、「子ども」と判断する年齢として、本稿の目的に鑑み、明記してある場合は十七歳を上限とした。十二歳〜十七歳は中学校及び高等女学校へ通うことが可能であるが、この年齢層で通学している子どもは一例のみ<sup>④</sup>である。

分析の単位は「作品」ではなく、登場人物の「子ども」とする。主人公の「子ども」は無条件に分析対象とし、主人公周辺の「子ども」についても性格および行動についてある程度詳細な記述がなされている場合は分析対象に含める。手順としては、まず「子ども」の行動、心理描写、周囲の人物・動物・植物・昆虫・玩具等との関係性を示した描写の中で、〈良い子〉および〈悪い子〉として分類される根拠となる文節を抽出し、作品や「子ども」の属性とともに一覧表を作成する。その後、男女という性別の属性を分析軸として、抽出した描写に

おける差異を検証していく。

なお、分析対象作品の二五三編のうち、男児が主人公の作品は一五八編、女児が主人公の作品が八一編、男児と女児がともに主人公となっている作品は一四編であった。前述した分析方針により、作品数の内訳と分析対象となった「子ども」の男児・女児の数は一致していないが、ストーリー上で男児が重視されている作品が多いことは明らかであり、ここに男女差がある点をまず確認しておきたい。

### 三、分析結果

本稿では、分析対象の子どもを、〈自己犠牲〉型、〈目的遂行〉型、〈思いやり〉型という三つの〈良い子〉像、および、〈加害〉型、〈不服従〉型、〈怠惰〉型という三つの〈悪い子〉像に分類し、それぞれに男女差を見出すことが適当と考え、河原説に代わるものとして提出する。表1は確認された作品数を男女別にまとめたものである（〈短所克服〉型については後述）。これらの〈良い子〉像、〈悪い子〉像は排他的なものではなく、それぞれが重なり合いつながらその子どもものの性格を形成していると考えられる。なお、分析対象となった子どもすべてがこれらそれぞれ三つの「良い子」「悪い子」に分けられたわけではなく、どちらにも属さない子どもも存在した。

以下、それぞれ三つの〈良い子〉像、及び〈悪い子〉像の詳細と、表象の男女差について見ていきたい。

表1 良い子・悪い子及び〈短所克服〉型 男女別数

	男児	女児
〈自己犠牲〉型良い子	0	6
〈目的遂行〉型良い子	18	6
〈思いやり〉型良い子	10	10
〈加害〉型悪い子	22	7
〈不服従〉型悪い子	23	12
〈怠惰〉型悪い子	4	0
〈短所克服〉型	14	0

注：二、分析方法で確認したとおり、本稿の分析単位は作品でなく「子ども」であるが、表1ではその「子ども」が登場する「作品」数を記す。これは、本文中で例を挙げた「六年生」や「官舎の子」のように、集団で同じ行動をとることで一作品中に良い子もしくは悪い子と分類される子どもが多数登場するものがあり、「子ども」の数では比較に適さないと判断するためである。

#### (一) 〈自己犠牲〉型良い子

〈自己犠牲〉型良い子は、耐える、我慢するといった、文字通り自己を犠牲にする行為によって問題を丸く収めようとする〈良い子〉たちである。確認できたのは六人であり、そのうち五人が主人公である。細田源吉「都へ出てみたら」（大正十四年六月）の主人公おときは、仕事で家を留守にする父に代わり、弟の面倒をすべて見てきた弟思いの姉である。弟に「東京といふところを頭にうかぶまゝに」夢物語のように話して聞かせていたおときだが、女中となるべくやってきた東

京の現実はいかに厳しく、弟に手紙を書くという約束も果たす暇がないほど働かされる。弟から「ねえさんはとうきやうがおもしろいで、それで、やくそくを、すつかりわすれてしまつたのでせう」となじる手紙が来るが、おときは「暇のないことで云ひわけをする気はさら／＼」なく、辛い境遇を弟だけには「知らせてはやれない」と思う。結局おときは返事を出すことが出来ず、父だけに「なにごともしんぼうしろとお父さまがおいひでしたから、しんぼうします……」という手紙を出すという結末である。また、交野なつ子「紙雛さま」(大正九年五月)の文字の家は、雛人形を買ふ余裕もないほど貧しい境遇にある。学校で念願の雛人形を作ることになり、文字は喜ぶが、先生の手違いで、自分が丁寧に作った紙雛と隣の席の君子が作った「ぞんざいな不恰好なお雛」とが入れ替わってしまう。泣きそうになる文字だが、決して「取りかへて下さいといふことが言へ」ない。お雛様を家に飾った後も悲しさはこみあげてくるが、「併し、いくら厭なところがあつても、それでもちやんと一人のお雛様なのですから、文ちやんにはそれを憎らしく思つたりすることは出来」ない。「本当のお雛さまは何年たつても買つて貰ふりもありませんでした。それでも文ちやんは一寸も悲しいとは思ひませんでした」という言葉で締めくくられ、悲しみを誰にも打ち明けずに我慢する(良い子)としての文字の性格が暗示されている。さらに、宇野浩二「優しい娘の話」(大正十四年九月)の主人公は継母にいじめられる「娘」であるが、唯一与えられる「冷たい握飯」でさえお腹を空かせた廿日鼠にすべてやってしまう。与えられた握飯が継母の意地悪で「石を包んだ紙屑」だった

と分かつた時には、「自分が食べられないのは、が、せつかく出て来た廿日鼠に食べ物かやれないのを悲しく思」うなど、自分自身が辛い境遇にあるにもかかわらず、他の弱者のために喜んで犠牲になろうとする。その他、暴力をふるわれ、ひもじい思いをさせられながらも「不平をこぼさず、いひつけられたとほり何でもまめにはたら」く召使いマルーシユカ(大木篤夫「十二月」大正十五年五月(六月)や、自分も曲馬団で虐待を受けて働く身でありながら、主人公幸吉の味方になり、「幸吉の手にあまるつらい仕事をかけながら手伝つて」ひっそりと死んでいくきえ(下村千秋「曲馬団の『トツテンカン』」昭和三年九月(十一月)、「みずほらしいみなり」の客が羽織紐を買えないのを見て、自分が貰える予定であつた紐をその客にやる美代子(木内高音「大晦日の夜」大正十五年十二月)なども、〈自己犠牲〉型良い子の女兒たちである。

〈自己犠牲〉型良い子の最も重要な特徴は、男児にはこれに属するものがない、という点である。右に挙げたきえが曲馬団で虐待されるのを自分の運命として受け入れ、ひっそりと死んでいくのに対し、幸吉はきえの死後「わか姉さん」の助けを借りて曲馬団から脱出、象を扱っていた腕を見込まれ、上野動物園で新たな職を得る。幸吉は、自分が置かれている現状が辛いものなら「おとなしく」我慢せず、自分から行動を起こすことで幸福を掴み取るのである。これは、次に見る〈目的遂行〉型良い子における〈行動力〉の男女差にも関わる部分であるが、以上のように〈自己犠牲〉型良い子が女兒特有の〈良い子〉像であることは、ジェンダーの視点から見逃せない。

## (二)〈目的遂行〉型良い子

第二の〈良い子〉像である〈目的遂行〉型の子どもたちは、周囲に困難や問題が発生した際、自ら考え、具体的な行動を起こすことで解決しよう、〈目的を遂行〉しようとする性格を持つ。彼らには、自分の困難だけでなく、しばしば家族、友達といった周囲の人々の問題にも対応する姿勢がうかがえる。〈目的遂行〉型良い子は男女ともに確認できるが、その際の行動力を分析すると、男児のほうにより積極性が確認できる。

上司小剣「碁から野球へ」(昭和三年十月)は、碁にのめりこむ父親を持つ鉦吉が主人公である。「あんなに毎日毎日、すわりこんで碁ばかりうつてゐては、体にさはるであらう」と心配する母のために、「どうかしてお父さんに碁を止めさしたい」と思う鉦吉は、「子供のことでどうすることも出来」ない立場ながらあらゆる策を講じる。負ければ負けるほど碁を打ちたがる父の性格から「勝つてばかりゐたら、きつと碁がいやになるにちがひない」と考えた鉦吉は、碁の相手になる人々の家を一軒ずつ訪ね、負けてくれるよう頼み込んで、みごと碁に対する父の興味をなくさせることに成功する。杉山正賢「六年生」(大正十五年八月)に登場する小学六年生の吉田君、保ちゃんらも、弱者に対し瞬発的に行動を起こす〈良い子〉たちである。冬の下校時、宿題を忘れた罰として掃除をさせられる下級生勇吉を見つけた吉田君たち五人は、「みんなで手つだつてやらう」と声を掛け合い、掃除を終わらせる。そして報告の際、「先生、三年生なぞに、一人で罰当番をさせるのはよして下さい」と「大きなこゑで先生に喰つてかゝるやう

に、づけづけとどなり、校長まで出てくる大騒ぎとなる。彼らは黙って勇吉の手伝いをするだけの〈良い子〉なのではなく、理不尽だと思ふ行為には敬うべき先生に対しても臆することなく意見する点で、積極的に問題解決に向けて行動する〈良い子〉だといえる。他にも、「曲馬団の『トツテンカン』」の幸吉(前述)、病気の父に食べさせるため「自分の生命を失つても構はない」という思いでお濠から鯉を盗む計画を実行する正作(上司小剣「鯉」大正十一年七月)、「笑う門には福来る」という言葉を知り、「笑ふ門」という門を家の前に建てれば苦しい家計が改善されると信じて一人で建立する梅吉(中村星湖「笑ふ門」大正十四年六月)など、困難に対する解決策を自ら考え、目的を果たそうとする積極的な〈良い子〉である男児たちは二十二二人、十八作品で確認できた。

一方、〈目的遂行〉型良い子に当てはまる女兒はわずか六人で、男児に見られたような〈行動力〉を持っているのは三人だけである。すなわち、卵を食べたいとぐずる病気の妹のわがままに困り果て、自分の家の裏の鶏のいる物置から卵を持ち出した初子(堤文子「たまご」昭和二年七月)、「魔法の鞆」に閉じ込められていた少年を助けたメリー(塚原健二郎「奇術師の鞆」昭和二年二月)、病気で寺から追い出されそうになった父のために、病気に効くという赤い睡蓮の花を探しに里川を訪ねて歩く「娘」(小川未明「娘と大きな鐘」大正十三年七月)である。残りの三人、エリヤ(塚原健二郎「乳屋のエリヤ」昭和二年十一月)、君子(紙雛さま)、前出)、八重子(伊従登美子「転校したころ」昭和二年八月)らは、これまでに挙げた〈目的遂行〉型良い子

とは異なり、弱者を「庇う」ときにだけその行動力を發揮する。以上から、〈目的遂行〉型の男児と同様の積極性を持つ女兒はほんのわずかであり、その行動力には男女差があると言わざるをえない。

さらに、〈目的遂行〉型の男児たちは全員が主人公であるのに対し、女兒の場合、君子と八重子は主人公の親友に過ぎず、目的を持った彼女たちのふるまいはストーリー上あまり重視されていない点も考慮すべきである。

### (三) 〈思いやり〉型良い子

これは、〈目的遂行〉型良い子たちのように具体的な目的を持って行動に移すことはないが、他人を気遣う、優しくする、心配する、同情するといった〈思いやり〉を持つ子どもである。翼が傷ついた鳥をただひたすらに心の中で案じる太郎（小川未明「翼の破れた鳥」大正十三年三月）や、十四年間大切に生きてきた時計を盗まれ、「惜しいといふよりは、可哀さう」と涙ぐむモ子（上司小剣「青い時計」大正十三年八月）など、〈思いやり〉型の子どもたちには男女差がないのが特徴である。太郎は鳥を、モ子は時計を、ただひたすら「思う」よりほかに解決策を思いつかない。ときにその〈思いやり〉が問題解決や成功に結びつくこともあるが、あくまで本人は無意識的である。ストーリー上内面が重視されているという点で、河原氏の提示する「良い子」像に最も近いと言える。

### (四) 〈加害〉型悪い子

続いて、〈良い子〉の対極にある三つの〈悪い子〉像の特徴を見ていく。一つ目の〈加害〉型悪い子には、〈他者に危害を加える〉描写の見られる子どもが分類される。こうした行為は男女共通だが、女兒は男児に比べて、危害を与える範囲、方法ともにより限定的である。

最初に〈加害範囲〉について検討する。男児が「村中の人々」、「みんな」など広範囲な不特定多数を相手にすることが多いのに対し、女兒にはその傾向がない。宮原晃一郎「閻魔のお腹」（大正十四年九月）の友太郎は「腕白の友ちゃん。」さう言へば、その界限で、誰一人知らない者のないほど腕白で、きかない男の子」である。ばあやは三、四カ月で二人も変わり、また近所の子どもたちも「みんな」友太郎にいじめられた経験があるため、友太郎の姿を見ただけで叫びながら逃げて行く。水木京太「果物の国」（大正十三年十月）のトムとジャックは、村に何か問題が起こる度に、「皆が『またトムとジャックだな』ときめてしまふほど、二人は村で有名な悪戯者」であり、有島生馬「宝探しの計略」（大正十年六月）の主人公太郎も、「いたづら」で「悪い子」、「従つてみんなから嫌はれて」いる。中村屋湖「虫をとる子」（大正十五年十一月）の松男が危害を与える対象は、姉、いとこといった身近な同年代にとどまらず、両親亡き後松男を引き取った叔父や叔母、さらに「虫」たちにも及ぶ。

一方女兒たちを見てみると、危害を与える対象は特定の人物に限られる。市川さわ子「北川さん」（大正十五年六月）では、主人公敬子とその同級生たちがクラスメイトの北川さんに嫌悪感を抱き、本人に

対してはつきり忠告したり、陰で悪口を言う様子がストーリーの中心となつてゐる。「十二の月」(前出)のわがまま娘ホレーナのいじめの対象は召使いのマルーシユカだけであり、小林かねよ「日曜ノ朝」(昭和二年八月)の光子と年子がからかうのは「ミソツ菌ノ、オデコノ、イケスカナイ梅子サン」だけである。女兒たちがいじめめる対象、悪口の対象はかなり限定されているといえる。

続いて、「加害方法」の男女差について。「加害」型悪い子が他人を傷つけるとき、その方法は、相手の身体を攻撃して傷つける場合と、力を使わず、怒鳴る、仲間はずれにする、無理難題を押し付けるなどといった行為によつて、目に見えない形で相手を傷つける場合に分かれる。前者を「身体的加害」、後者を「精神的加害」と定義し、「加害」型悪い子をこの二種類の加害方法により分類すると、「身体的加害」を行なうのは男児に限られ、ここにも男女差が生じている。

例として、男児同士、女兒同士の喧嘩のようすをそれぞれ検討してみる。坪田譲治「小川の葦」(昭和三年九月)の男児同士の喧嘩では、「ネツキ」という遊びをしていると「いつでも」「言ひ合ひ」がはじまり、その「言ひ合ひ」が「なぐり合ひ」になること、またそれが日常「茶飯に見られることが確認できる。一方、伊東文雄「官舎の子」(昭和四年一月)では、女兒が二つのグループに分かれて互いに「さげすみ、「ばかにし」合い、よく「けんかをし」ているが、男児のように力による暴力をふるふことはしない。女兒たちにとつて「うんといじめてやる」とは、「みんなが石けりしている真中を、わざと通つてやる程度である。またチョークで似顔絵を落書きされた「仕返し」をす

る時には、女兒たち自身は手を出さず、男である「お兄さん」を連れて行つて叱つてもらふ点からも、男女差は明らかである。

他の作品においても、男児たちはしばしば「身体的加害」によつて他者を傷つける。相手は人間にとどまらず、「尻尾を持つて逆に吊し上げたり、つぶされさうな猫の背に馬乗りをしよう」と「まるで気狂ひのやうに」飼ひ猫をいじめめる太郎(水木京太「同情学校」大正十三年四月)や、「それはいたづらな、まるで斑駒ふちまを生きながら逆剥さかむにして忌機殿いみたまごに投げ込んだあの素戔鳴尊のやうな悪い子」で、金魚を次々に殺して干物にする、カナリヤやウグイスを串刺しにして焼くなど、残酷な行為を繰り返す太郎(有島生馬「宝探しの計略」大正十年六月)など、動物に危害を加える例もある。しかし、女兒たちにはこうした暴力性が見られず、いづれも「精神的加害」である。

ここで注意したいのが、男児の場合は「身体的加害」(「精神的加害」、どちらの加害方法を用いることも可能な点である。「身体的加害」だけを使つているわけではなく、身体的加害に発展するケースが多いため結果として「精神的加害」が目立たなくなつていただけなのである。これは「小川の葦」(前出)の男児の喧嘩が「言ひ合ひ」で始まることなどから判断できる。「加害」型悪い子像における「加害方法」の男女差は、「男児」(「身体的加害」)「女兒」(「精神的加害」)という二項対立で説明されるべきではなく、男児には可能な「身体的加害」が女兒には見られないという点に注目するべきである。

(五) 〈不服従型〉 悪い子

これは、目上の立場の人からの禁止、忠告、叱責などがあるにもかかわらず、それらを無視した行動に出たり、それを繰り返したりする子どもたちである。母親に禁じられている池へ妹春子を連れて行き、帰途を急ぐあまり春子を見失う一郎（福永渙「金の馬と銀の馬」大正十二年二月）や、両親から禁止されている木登りをしたため、指を切斷する大怪我をして「親のいふことには間違ひはないだらう。罰だ」と言われる奈美子（武久照子「櫛の木」大正九年三月）、隣家から迷い込んできた子犬を飼いたいばかりに、母親に嘘をついて子犬を引き出しに隠し、窒息死させてしまう正子（堤文子「犬の子」昭和二年十二月）などが分類される。小野浩「お寝台のはなし」（昭和三年五月）の三郎、島崎藤村「コケコツコ」（大正九年一月）の兄弟、江口千代子「銀の御殿」（大正八年七月～八月）の暁子、江口千代子「朝顔の花」（大正十年十一月）の愛子らは、早寝早起きができず両親を困らせている点で共通している。子どもが〈不服従〉な態度をとる相手、およびその態度などに男女で大きな差は見られない。

(六) 〈怠惰〉 型悪い子

これは、怠惰、ぼんやりしている、面倒なことが嫌い、仕事をしないなどの性格を持つ子どもたちである。広津和郎「太助の薄馬鹿」（大正九年十一月）の太助は「薄馬鹿で、怠け者で村中で一番やくざ者」である。兄二人は立派な百姓、立派な学者になっているにもかかわらず、その中で太助だけが毎日天気さえ良ければ蜻蛉を追いまわして遊

び、雨が降れば家の中でごろごろして「少しも仕事をしようとも」しない。蜻蛉を捕まえるのでさえ他の子のように「走り廻るのが大儀」で、竿にもちをつけて立てておき、ごろりと寝そべるほどである。宮原晃一郎「鶉の頭四郎」（大正十五年十一月）の四郎も「村ぢうで、一とう腕白の、一とうなまけ者といふ評判のたかい」子どもで、尋ねてきた托鉢の僧侶にお布施の米を渡すよう母親から言われても、全く動こうとせず、結局母親が台所仕事を中断して対応する。その他、「何一つすることを好かないやうで、いつもぼんやり、爐の傍に座つて、火箸で爐の中の灰ばかり掻きちらして」、「のん気」な次郎（宮原晃一郎「灰掻き次郎」大正十四年十一月）や、「畑へ行くと」、「二時間でも三時間でも、うねに腰をかけて、ぼんやりして」おり、走り使いをさせると「一時間たつても二時間たつても帰つて来」ないでチャボと遊んでいる平七（福永渙「馬鹿をどり」昭和三年九月）などが分類される。以上の〈怠惰〉型悪い子も、男児に限られる点の特徴である。他の二つの〈悪い子〉像に比べ、男児の例自体も四人と少ない点は考慮すべきだが、「怠け者」、「ぼんやりとしてゐる」、「面倒くさい」、「仕事をしようとしな」と言った表現が女兒には見られない点は見逃せない。

(七) 男児だけが持つ 〈短所克服〉 型ストーリー

以上、それぞれ三つの〈良い子〉像、および〈悪い子〉像について見てきた。これらはそれぞれ排他的なものではなく、一人の子どもが〈良い子〉像を複合的に持つ場合があるのと同様に、〈悪い子〉に属しながら同時に〈良い子〉にも属するという子どももいる。このような



子どもが見られる要因は二つあり、一つは病気の父を喜ばせるために「お濠の鯉を盗んでしまう上司小剣「鯉」(大正十一年七月)の正作のように、ある行為が〈良い子〉と〈悪い子〉の二面性を持つケースがあること、そしてもう一つは、ストーリーの展開に従って〈悪い子〉から〈良い子〉へと転じる子どもが見られることによる。本稿では、後者のタイプを〈短所克服〉型と呼び、別に分類をして、以下に検討する。

〈短所克服〉型の最大の特徴は、属しているのが男児にほぼ限られる点である(表2参照)。例えば、伊藤英子「弱虫」(大正八年四月)の太郎は六歳で入学を迎えるが、「それはそれは意気地のない」「弱虫」な「甘えツ子」で、学校で「ぼろぼろ涙をこぼし」、「お机の下へ潜りこんでお弁当を食べて」から、すぐに「鉄砲玉のやうに馳け出し」て家に逃げ帰ってしまうほどである。しかし、小さな男の子が「町のいちめつ子達」相手に一人で喧嘩していることに感化され、「片端からポカポカ皆をなぐり」、「とう／＼いちめつ子をみんな追ひ払」うことに成功する。「それからといふものは、すつかり、強い、勇ましい男らしい、立派な子になつてしまひました」という文章に見られるとおり、太郎は「弱虫」という〈短所〉を克服したのである。小川未明「その日から正直になつた話」(昭和二年九月)の「少年」はたびたび嘘をつく癖があり、「お前は、子だけど、ていさいのい、嘘をつくの、で、悪い子になつてしまつた」と母に泣かれるほどであった。しかしある旅人との出会いが「少年の心を深く感動させ」、「もう自分は、決して、嘘を言つては、悪い」と思うようになり、「それから少年は、正直な

子供となりました」という、まさに〈短所を克服した〉ことがわかる文章で作品は終わる。この他、皆に恐れられていた「閻魔のお腹」(前出)の友太郎は、「閻魔様」に首筋をつかまえられ食べられそうになると、「すつかり閉口する」経験をした結果、「それ以来ずつとおとなしい、い、子にな」る。また、村に何か問題が起こる度に、「皆が『またトムとジャックだな』ときめてしまふほど」、「村で有名な悪戯者」であつた「果物の国」(前出)のトムとジャックも、盗み食べた果物たちに逆襲され、苦しめられる経験を、「それからは生れ変つたやうない、子にな」る。

短所を克服した上、それを契機として後に大きな成功を収める男児たちさえいる。豊島与志雄「強い賢い王様の話」(大正十年八月)の「王子」は、「むやみに高い所へ上る」という困つた「癖」を持っていたが、世界で一番高い山に登つて下りられなくなつた経験から、「高い所へ上るには、まづ第一に、また下へ下りられるやうな道を、こしらへて、おかなければいけない」と考えるようになる。「この王子は後に、世界で一番強い、一番賢い王様になりました。なぜなら、どんな高い所へ、上つても平気なほどしつかりした気象キキョウでしたから、一番強かつたのですし、またちゃんと下り道を拵しじゆへておくほど用心深かつたから、一番賢いのでした」という結末で終わるのである。この王子の場合、高いところの上るといふ〈悪い〉行為をすつかりやめてしまふのではなく、失敗した経験から解決方法を学び、「しつかりした気象」を示す行為へと意味付けを転換していく強さがうかがえる。

〈加害〉型悪い子の例として挙げた「虫をとる子」(前出)の松男の

ように、論されても性格が直らない男児もいるが、男児たちには、も

ともと〈悪い子〉と判断される行動や性格Ⅱ〈短所〉を持つてはいて

も、何らかの経験を踏まえてそれを克服し、「それから」は「すつかり」

「生れ変わったやうな」「いゝ子」を典型的なキーワードとして、「良

い子」へと転じていくストーリーが用意されていた。さらに、「強い

賢い王様の話」(前出)の「王子」のように、より大きな成功へとつ

ながっていく例さえあった。ところが女兒には、これらの男児のよう

に〈良い子〉へと転じるストーリーが用意されていない。〈不服従〉

型悪い子として例に挙げた、禁止されている木登りをして足の指を一

本失い、「いつまでも一人で悔」やむ「櫛の木」(前出)の奈美子や、

母に逆らって子犬を隠したため窒息死させてしまい、「こちこちにな

つてゐた子犬にすまないやうな気がして、なみだ涙をあとからあとから「流

す「犬の子」(前出)の正子らは、反省や後悔をすることはあっても、

「それからは」「すつかり」「生れ変わったやうな」「いゝ子」になると

いった〈短所克服〉のストーリーをほとんど持たないのである。例外

が、「銀の御殿」(前出)の暁子、「朝顔の花」(前出)の愛子の二人で

ある。早寝早起きができないという彼女たちの短所は、「お寝台のは

なし」(前出)の三郎、「コケコツコー」(前出)の兄弟と同様に、母

親の努力によって「いつのまにか」「すつかりなほつて」おり、暁子

の場合には「生れ変わったやうな素直な子」になったという(表3参照)。

しかし、男児が克服した〈短所〉が弱虫、嘘つき、怠惰、暴力的であ

るといった本人たちの性格そのものにかかわる本質的な部分であるの

に対して、女兒二人の〈短所〉はそうとはいえず、また〈短所〉の種

類も非常に限られている。

以上から、〈短所克服〉型のストーリーは、一般に男児だけに用意

されていたものであると考えられる。逆に言えば、女兒が〈悪い子〉

の要素を克服して大きな成功を掴み取ることはないのである。

表2 男児〈短所克服〉型一覧

作者名	作品名	出版年月	巻・号	対象名(年齢 または学年)	主人公	ストーリー及び短所が記されている描写	結果・その他「短所」を克服したと推察される描写
有島武郎	一層の葡萄	大98	5巻2号	僕	○	「僕」は「体も心も弱い子」であり、「その上臆病者で、言ひたいことも言はずにすずやうな質(筆者注)だ」で、だからあんまり人からは、かはいがられなかつたし、友達もない方。学校の友達ジムの持つ総の鼻がどうしても欲しくなり、盗んでしまう。友人たちに責められるが、「先生」は「僕」に葡萄を与え、優しく接する。	「二人は今からいとお友達になればそれでいいんです。二人とも上手に握手をなさい」と先生に向かい、言わされ、ジムのほろから積極的にお仲間をする。「僕はその時から前より少しいい子になり、少しはにかみ屋でなくなつたやうです」。
伊東英子	弱虫	大84	2巻4号	太郎	○	幼稚園に入園するが「弱虫」で甘えっ子なので家が恋しく、抜け出して帰つてしまう。家は大きいに「弱む」。	同級生といじめっ子とのけんかに加勢したことから、最後には「すつかり、強い、勇ましい男らしい、立派な子」になり、「要る日から、お迎へなんかもすつかり所つて一人で幼稚園へ通ふやうになりました」。
宇野千代	空になつた重箱	昭21-2	18巻1-2号	三吉(13)	○	良く働き、痴呆の祖母を養いながら生計を立てていた三吉は、その養父として「正しいものは何でも手に入る」という「お重」と「眼鏡」を「白髪のお婆さん」からもらう。二つを使つていたつらさをするのが面白くてたまらなく、家にまると帰らなくなる。祖母を病院に預け、「気が無くなつて顔腫れ」になる」。	「白髪のお婆さん」から諭され、再びがすつかり心を入れかねる。お重も返し、「元のやうによい子供になつて、お婆さんを大切に、せいいばい働きます」と宣言。
小川未明	その日から正直になつた話	昭29	19巻3号	少年	○	「お前はいい子だぞ、ていさいのいい嘘をつくの、悪い子になつてしまつた」と母に泣かれるほど、たびたび嘘をついてしまう。ただし、その嘘は罪のない、ちよつとみんなを面白からせよととする種類のものだが、「ただみんなからは、この少年を、信用しなくなる」。	旅人との出会い、やりとりによつて「正直といふものは、かならず相手を感心させすにおかないものだ」と知り、「それから少年は正直な子供となりました」。
小川未明	青い鉛	大141	14巻1号	正雄(小学校 時分J)	○	転校してきた「水野」という女の子に、細のみんなできつねいというあだ名をつけていじめられている。	母に「弱い者をみんないじめてやる。これは単独なこと」と言われ、「真に悪かつた」と感じる。次の日からはみんなに「弱い女の尻をいぢめるのは、単独だから、よさう」と言う。「いままでのやうに、水野に対して『きつね』と罵つて、からかふものがなくなる。家を行き来して仲良くない、水野から父の形見の青い石の鉛を三つもらう。しかし、何も告げないまま水野は突然転校する。

小野浩	お寝台のはなし	昭35	20巻5号	三郎	○	「夜ふかしをする。寝るのが嫌で、お寝台なんか、大きいわ。あんなもの、くたがつまふといふ言う。」	「お寝台が快適でいい。寝ないでよくたつたと慕ぶが、だんだん眠くなり、「早くのお寝台、帰ってきておくれ！」と叫ぶと、帰ってきて、「そのことがあつてから、三郎は八時になるとすぐに「おやすみ」をして、ひとりで二階へあがるやうになりました。」
菊池寛	納豆合戦	大39	3巻3号	私(もしくは12)	○	冒頭の納豆売りのお婆さんを子どもたちがみんな守だましてからかい、「納豆合戦をしていった。」	お婆さんに叱られ、「穴の中へでも、這入りないうやうな恥いさど、悪いことをしたといふ後悔まで、心のなか一杯になる。母に頼んで、このお婆さんから毒朝鮮豆を買い、「恩返しするようになる。」
島崎藤村	コングツコー	大31	4巻1号	「兄弟の子供」	○	「揃ひも揃つて朝寝坊、「何度も何度も母さんに呼ばれなければ自分で直ぐには起きられませんでした。」	母親のアイデニアで、早く起きて「鶏が鳴き声鳴くか、梨を割けて言い当てることになる。二人は「どちらがそれを重ひ当てるか決しめて、1めづらしく早く腹をさます」。母は梨を半分にして、二人に与える。「どうです、朝早く起きて見ると心もちの好いことがわかりましたらう」。母親の努力で早く起きられるようになる。
豊島与志雄	強い賢い王様の話	大108	7巻2号	王子	○	「むやみに高い所へ上る」のが好きだといふ困つた「癖」がある。国王や家来が「いろいろ言つてきかせました」が、王子は平気で、聞かない。	ある「老人」に「世界で一番高い山」に連れて行かれ、下りて行くことができない。一か八かであちから「ばい」に飛び下りる。それから「高い所へ上る」は、まづ第一に、「また下へ下りられるやうな道を、こちらへ、おかなければいけない」と思うようになり、国王に話す。国王は大変喜び、王子を自由にさせるようになる。「この王子は後に、世界で一番強い、一番賢い王様」になった。
水木京太	果物の国	大1310	13巻4号	ジヤック トム	○ ○	「喧嘩友達」「悪戯友達」して有名な二人。寝ている人の顔に糞を塗る、酒屋のおばさんの顔の髪をすつかり刈り取る、大に包帯で目隠しをして村はずれに迷わせる、林檎がもぎとられる、といつた「さういふことが超える度に、皆が『まどろムとジヤックだ』とよめてしまふほど」である。「いくら学校先生の先生が罰へても両親が叱つても、さういふいたづらが止まない」ので、「村中でもあましてやりまして、それぞれの家では互いに相手の子どもが自分の息子をこつこつ性格にしてしまったと言い、一緒に遊ばないよう止めるが、「平気で相かはらず二人で村中をあはね廻る」。	糞の中に吸い込まれて、「果物」に懲らされる。「坊さん」に助けられ、「果物」のお化のことであつた坊さんから聞いた親切な訓へどを「忘れず」に、それから生まれ変わったやうないい子」になる。親同士も仲良くなる。

宮原異一郎	鶴の頭四郎	大1511	17巻5号	四郎	○	「村ちうで、一とう面白の、一とうなま掛けといふ評判のたいい子供」。「托鉢の坊さん」が米をあけるよう母親から直いつけられても、「うーん、いまやるよ。面倒さ、」と返事だけをしてまったく動かない。母は「こんな悪い子は、もうもういや」と言い、坊さんに四郎を一緒に連れて行くように頼む。	「坊さん」に「ほかいど一つ」戻りつけられ、氣絶している間に「国の旗の頭」に出世した夢を見る。この夢の体験をきっかけに、四郎はすっかりまじめな、いい子になり、後には鶴を飼ふことの名人になって、その国の殿様につかへ、鶴の頭四郎といはれるやうになり、夢は正夢となった。
宮原異一郎	間廣のお腹	大149	15巻3号	友太郎(5)	○	「いたづらで、面白で、またかなり可愛い、はあ、やは友太郎にいじめられるために三、四ヶ月で二人代わり、また近所の「子供」を竹さくで物も言わず取つて大きなお徳頭ほどの體を併へ、」と、「打つ」、「罰る」、「蹴る」がして泣かしたりするため、昔友太郎に列して「腫物を舐るやうに、ひくひくしている。	「間廣様」に首筋をつかまえられ、お腹に入れられそよになるという「すつかり閉口する」経験を、「友ちゃん」はそれ以来すつとおとなしい、いい子になる。
宮原異一郎	反掻き次郎	大1411	15巻5号	次郎	○	「何一つすることを好かないやうで、いつもぼんやり、爐の傍に座つて、火箸で爐の中の灰ばかり掻きちらして、」父や母にはさんさん注意され、叱られる。	「河童」に騙されて「灰の中から黄金の粒を拾ひ、宝島渡りに出かける。「化物を倒してお婆さんを助けるなど、行動的になる。「河童も次郎の勇氣に恐れ、それから後はもう何にも悪いことをしませんでした。」
福永漁	馬鹿をどり	昭39	21巻3号	平七	○	「生れつき親軍がにぶい、熊赤人の家に養子に出しても、どこにやつてもすぐ返されてしまったため、仕方なく地主の家の百雄奉公をする。「百雄の仕事も、平七には他の同じ年ごろの子供の半分もできず、「畑へ行くと、二時間でも三時間でも、うねに腰をかけて、ぼんやりして、歩行儀をさせるど一時間たつても二時間たつても帰つて来ないで、「殿治屋の度で、ちやほと遊んでみる」といつたことが嫌なため、ついに地主の家でも退寮をつかされる。	「馬鹿」はばはりされるのが嫌になる。「反抗心を起して、「今にどうなえらいものになつて、みんなを驚かしてやるぞ」と考える。「母親」、「殿治屋のお婆さん」、「床屋の買さん」、「たばこ屋の圓居」など「村ちうの物知り」の家をたづねて相談する。誰も相手にしなかつたが、「鳥」が「馬鹿をどりのけいこ」をするんだとアドバイスする。平七は「差衆」ならはもちろん、「ぼん馬鹿をどり」がいよいよはれてある若ものでさへ舌をまくほどになる。「平七の馬鹿は、息子が名高くなつたので、大さうよろこびました。」

注：作者名・作品名の50音順。また、「主人公」欄には分析対象の「子ども」が主人公の場合に「○」を記す。次頁表3もこれと同じ。(短所克服)型に該当する男児は全員主人公である。

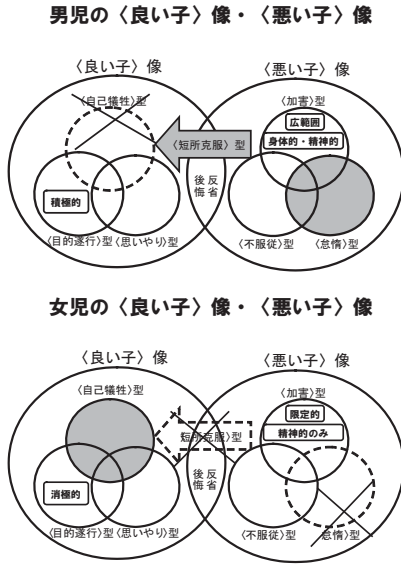
表3 早寝早起きができるようになった女兒一覽

江口千代子	朝顔の花	大10.11	7巻5号	愛子	○	「朝はいつかわし過ぎにならなければ、いらされてもちつと起きません、夜はいつまで起きてみて「寝よう」としない。	朝顔を使った母と姉の作戦により、「愛子の朝顔病は、すっかりなほつてしましました。」
江口千代子	鐘の初歌	大8.7-8	3巻1-2号	晴子(7)	○	「我儘な子。」「一番いけない癖は、夜寝る時に、いつても感傷曲を言つてゐて、みんなを困らせること。お禮物を早くおいていと言つて女中を打つたり、手母が別荘へお迎えに来るのが遅くすんすん一人で帰つてしまふなど。	朝顔である「お母様の努力により、夜もすく睡るようになる。「こんないい方をお母様に持つてゐるのだからく言うことを謝らなければいけないと思ひました。晴子は、それからは生まれ愛つたやうな素直な子になつて、今にお母様のやうな立派な方になるのだと言つてゐます。」

四、考察

(一) 女兒はどのように捉えられていたのか

前章で分析したように、女兒にのみ見られる特徴として、①「自己を犠牲にする」、②「行動力が弱い」、③「暴力的でない」、④「逆転成功の可能性が絶たれている」、という四点が認められる。図1は以上の分析結果を図式化したものである<sup>(5)</sup>。



注：網掛け部分はその性にも見られる〈良い子〉像及び〈悪い子〉像であることを示す。またこの場合、他方は破線および斜線(x)によって対応するものがないことを示す。

図1 〈良い子〉像および〈悪い子〉像の男女比較図

①の「自己を犠牲にする」女兒像には、当時の「愛情」規範が関係していると考えられる。「愛情」規範とは、渡部周子氏が「就学期にあつて、出産可能な身体を持ちつつも結婚まで猶予された期間」として定義した「少女」を持つ、「愛情」に関わる規範的言説である。渡部氏によれば、女子教育は将来良妻賢母となる「少女」の心性を「愛情」深く教化することを意図していた。高等女学校用修身教科書は明治三十四年に発行が始まったが、そこには「女性は本性的に『愛情』深く、家族に犠牲的に献身することがその崇高な使命であると記され」、さらに「女性はその優しさによって男性を励ましたり、男性が困っている時には助け」ることが説かれている<sup>(6)</sup>。また、小山静子氏も「女性の特性」である「女性の愛情」に関する言説について言及しており、大正九年以降の修身教科書になると、「女性」の「愛情」を注ぐべき対象が「家庭」を超えた社会一般にまで広げられていることを指摘している<sup>(7)</sup>。渡部氏のいうように、主人公幸吉を助けながら虐待を受け死んでいく「曲馬団の『トツテンカン』」(前出)のきえ、都で女中をしながら故郷で学校に通う弟や父を助ける「都に出てみたら」(前出)

のおときなどからは、ほぼ同年齢の男児のために身を挺したり、家族に献身したりする様子が確認できる。今回の調査によって、「愛情」規範については渡部氏の定義を超えて、「自己犠牲」型に属している女兒たちの年齢層にも適用できることが明らかとなった。

もう一つ、当時の社会が『赤い鳥』に描かれる年齢層の女兒に「愛情」規範を求めていたことの根拠となるのが、学習院初等科、学習院女子部に勤めた馬上孝太郎の著作『少女の教育』（大正三年七月、目黒書店<sup>(8)</sup>）である。これは渡部氏も紹介しているものだが、馬上は「少女」の定義を渡部氏が定義した高等女学生ではなく「小学校以下の女子」と定義して論を進めており、本稿が分析対象としている年齢層により適合しているといえる。「愛憐の情の発作は少年に比して少女の方頗る著しいものある」「真に犠牲となるものが多く高潔なる犠牲は寧ろ女子に限」ったものであり、「少女時代に於いては愛情を以て女子自然のものとし之を保護撫育して少女自然の性情を害せぬ様に心掛けなければなりません」と主張する馬上は、「高潔なる犠牲」をもって愛情を發揮することが、「自然」な「少女」の姿だと述べているのである。さらに馬上は、「少女」の愛情發揮の具体例として次のような話を紹介している。

(二) 何処の小僧かは知れませんが下駄の緒を切らして困つて居ります。之を見た学校帰りの一少女。自分の袂なる糸切れ布切れを出して与へました。

(四) (筆者注・以下は「此頃自分で心に満足したと思つた行為は

なきか」と問われた少女の返答) 十二の小僧が目を泣きはらしながら何か頼りに捜してをります。どういたしましたと尋ねますと私は今母の目薬を買ひに行く途中二十錢銀貨一枚失くしましてと申します。気の毒でなりませんから造花の材料を買ふつもりであつたお錢を与へてやりましたら小僧は要りません要りませんといひましたが無理に取らして私は帰りました。

特に(四)の例は、自分が貰えるはずであつた羽織紐を、客のために諦めてやる「大晦日の夜」(前出)の「自己犠牲」型良い子の美代子とほぼ同じ行為である。このように、犠牲を「少女」に強いる当時の「愛情」規範は、『赤い鳥』に描かれた年齢層にも適用される思想であつたと推定される。女兒より男児が優先され、また女兒たち自身も自己を犠牲にすることを厭わぬような規範を教えられ、受け入れていたことが、「自己犠牲」型の女兒像に反映していると考えられる。

次に、②の「行動力が弱い」女兒像は、「目的遂行」型良い子に属する女兒の行動力の弱さ、ストーリー上の配置に見られる消極性、さらに「(加害)型悪い子に属する女兒の「(加害範囲)」が男児に比べて限定的であつたことによる。女兒の身体的能力の低さによる男女差というよりも、女兒の行動を制限する社会規範が作り出した女兒像だと考えられる。

③の「暴力的ではない」女兒像は、「(加害)型悪い子像における「(加害範囲)」が男児よりも狭く、また「(身体的加害)」を行う描写が一切ないことによる。女兒が男児に比べて暴力性が低いとみなされているこ

とを示すと同時に、当時の社会が、男児の身体的暴力には寛容でも、女児には厳しかったことが推察される。

④の「逆転成功の可能性が絶たれている」女児像は、〈短所克服〉型が女児には見られなかったことによる。女児の場合は、〈悪い子〉から〈良い子〉へと転じていくストーリー展開が見られず、従って、逆転成功する可能性も当然存在しない。筆者は、この④の女児像に、当時の女児への見方が最も投影されていると考える。特に、購買層として『赤い鳥』を支えていた新中間層においては、男児はたとえ〈短所〉を持っていても、それを克服し、立身出世していくことが可能であったのに対し、女児の場合は、たとえ〈短所〉を克服できたとしても、将来的に男児ほどの社会的成功を望むことはできない、と考えられていたのではないか。①の「自己を犠牲にする」女児像も、つまるところ女児が何か行動をおこしたところで男児ほどの成功は望めないという、当時の人々の見方の裏返しと考えられる。

以上から、これまで「子ども」としてひとくくりにされてきた幼少の年齢層、また何らかの理由で中等教育を受けていない層にも男女の表象の差異が認められ、女児特有の特徴が四点存在することがわかった。

## (二) 近代的「子ども」像―〈子ども〃純真無垢〉説再考に向けて

本稿では、河原和枝氏が提示した三つの「子ども」像のうち、特に「良い子」に着目して調査を行ってきた。河原氏が「目的に向かっ

さや思いやりを示す『良い子』にとどまっている」とした「良い子」像は、本稿が分類した〈思いやり〉型良い子像と一致していると言える。しかし、河原氏と重なる〈思いやり〉型だけではなく、〈目的遂行〉型良い子が本稿において新たに見出したことの意味は大きいだろう。「理想の現実に向かつて積極的に行動する『良い子』は少数派」とされ、その事例も挙げられていなかった従来の「良い子」たちだが、実は目的を持ち、積極的に行動を起こしていた子どもが、男児二十二人、女児六人確認されたのである。

また、新たな〈良い子〉像に加え、〈加害〉型、〈不服従〉型、〈怠惰〉型という〈悪い子〉像を新たに提示したことで、「良い子」「弱い子」「純粋な子」だけでは「子ども」像の枠組みとして不十分であることを明らかにした。河原説の提示する「子ども」像三つは、それぞれが同等に並んでいるというよりも、むしろ「弱い」要素を持っているゆえに、または「純粋」な要素を持っているゆえに「良い子」として分類できると考えるのが自然ではなからうか。同様に、本稿が提示した〈悪い子〉と、河原説の「弱い子」「純粋な子」との対応関係を考えてみると、「弱い子」だから、もしくは「純粋な子」だからゆえに〈悪い子〉として分類されうる、ということができようであろう。

主人公の「周辺の子ども」たちが主人公に対して〈悪い〉行動をとることは、ストーリー展開として自然な流れであり、〈悪い子〉も当然出てくると考えられるのだが、しかし「主人公」レベルの子どもたちも〈悪い子〉の要素を持っていたのである。しかも、〈悪い子〉であることを最後まで克服できずに終わる子どもも多かった。『赤い鳥』



の研究史の中で、〈純真無垢〉な「良い子」とは対極にある〈悪い子〉という「子ども」像を見出したこともまた、本稿の成果といえよう。

年、ほるぷ出版に拠る。引用に際して、漢字は現行の字体に改め、ルビは適宜略した。

## 注

- (1) 鳥越信『日本児童文学』、一九九五年、建帛社、佐藤宗子「『赤い鳥』の出現」(鳥越信編『はじめて学ぶ日本児童文学史』、二〇〇一年、ミネルヴァ書房)など。
- (2) 河原和枝『子ども観の近代―『赤い鳥』と「童心」の理想』、一九九八年、中央公論社。
- (3) 本田和子『異文化としての子ども』(一九八二年、紀伊国屋書店)において「少女小説」の研究の遅れへの批判が行われたことに端を発し、以後、主に少女少女雑誌を分析対象として、「少女」の表象や「少女」文化が論じられている。
- (4) 伊東英子「洗礼」(大正十一年六月)の主人公みや子で、「女学校の一年坊主」と明記されている。彼女は十二歳、または十三歳と推察されるが、分析対象からは外す。
- (5) それぞれの〈良い子〉像、〈悪い子〉像が複合的にその子どもの性格を形成していることを、図ではそれぞれの集合が重なり合う部分で示しているが、必ずしもその重なりに該当する子どもが存在するわけではない。
- (6) 渡部周子『〈少女〉像の誕生』、二〇〇七年、新泉社。
- (7) 小山静子『良妻賢母という規範』、一九九一年、勁草書房。
- (8) 引用は、中島邦編『近代日本女子教育文献集 第二二巻』、一九八四年、日本図書センター所収に拠る。

付記 『赤い鳥』からの引用は、日本近代文学館『赤い鳥 復刻版』、一九七九